



## みちくさ言語療法—ことばの発達と障害の臨床より—

### (4)多様性がある発達や子育てのかたち

工藤芳幸

#### ある日のお店屋さんごっこ

前号から引き続き、放課後等デイの活動の1コマから、現場での子どもたちの姿を素描したい。この日は小学1年生のグループで「お店屋さんごっこ」が企画された。様々な色の軽量粘土を使い、グループでお店を1つ決めて商品を作ったり売ったりする遊びだ。果たして「お店屋さんごっこ」を楽しめるのかな？という一抹の不安があったが、基本的には好きなモノを作る活動なのでそれぞれ楽しめるポイントがあるだろう、と取り組んでみた。

厳選なる話し合いの結果、すし屋とケーキ屋の2チームができた。すし屋はチェーン店のK寿司なのだという。K寿司には皆行ったことがあるので、具体的なイメージが喚起されて、やろうやろうという運びとなった。ケーキ屋さんには1人の女の子がやりたいと言って、皆を引き込んで成立した。決め方、決まり方はそれぞれ異なった。それぞれのチームに分かれて製作がスタート。作りたいモノに必要な色がないときに困ってしまうこともあった。ただ困っているだけの子もいたが、粘土の貸し借りのコミュニケーションも発生した。貸し借りの様子を見て、それを模倣する子もいた。

ある子はやりたいことはあるが明確なイメージやスキルがない。ショートケーキを作ろうとしていたのだが、ケーキの三角の立体を作れない。どのように成型したらショートケーキの形になるんだろう？と試行錯誤したが「できない」と諦める。そこで作り方のプロセスのモデルを示すと模倣して作ることができた。

「ホールケーキを作る！」と意気込んでいる子もいた。チーム内の他の子どもたちと分担して完成させることを見込んで複数の部品を作ることをイメージした。意気込みは素晴らしいが、最終形までのプランニングやコーディネートのためにやりとりすることがないので（隣の子と同じモノをそれぞれ好きなように作っている）、とにかく「部品」がたくさん出来上がる。ある程度までできたときに、「この部品はどうなるんだろう？」と問いかけ、「もうすぐ（〇時から）お店だよ」と残りの時間を知らせ、「〇〇やってみたら」と提案してプランニングを手助けして、少し製作も手伝って何とか完成して“開店”にこぎつけた。

お寿司屋さんチームは「K寿司で毎週食べている！」というお店イメージが活性化されていた。ただ、やる気は満々だが技術が追いつかず、山盛りのワサビを作ったりして、なかなかメインのお寿司が出来上が

らない。イメージ先行である。保育スタッフの手伝いもあって、いくつかのお寿司は完成した。“お店”で売るターンになると、役割を演じることに照れたり、はしゃいだりして、なかなか売り子としての役割を貫徹しないのだが、遊びとしてその状況を楽しんでいた。

### ケーキを売るのはひと苦勞

自閉症スペクトラムとされている子が少ないグループである。とりわけその特性が強いAくんはマイイメージ、マイワールドを展開して製作をしていたが、「こんな作る」、「ほら、こんな作った」と周囲に見せてまわってもいる。とにかく自分が作ったモノを見て欲しい気持ちでいっぱいだ。

Bくんは“完璧な”イメージがあってショートケーキやホールケーキ、完成度の高い看板を製作した。ところがケーキを売る「お店」の文脈になるとアイデアやイメージがなく何をして良いのかわからない。もうこれでお店始められるの？という問いにフリーズして目を白黒してしまう。その場でぴょんぴょん飛び跳ねる。お客さん役が来ると、どうしてよいかわからないのでセリフを教えると「◎◎は250円ですよ」伝えたとおりにいうが誰も聞きゃいないし、聞かせるように注意を引くことも至難の業だった。恐らくケーキ屋さんに行った経験はあるのだが、いつどこで誰と何をしたというエピソード（スクリプト）が惹起されず、ケーキの視覚的映像はバッチリなのであろう。对人的な行為については背景に沈んでしまっていたようであったが、ここでは自分の作ったケーキを売るために何

とかしたいと思っているようで、何度かセリフを言って、ケーキをカゴに入れて渡そうとしていた。

それぞれに育っているところがあり、それぞれに苦手なところがある。他愛のない遊びのように思えるが、こうした活動は一つの小さな社会を形成している。子ども自身が生きている文脈が見え隠れする。共有できることもあれば、共有できないところもある。やりとりにズレもあるが、どうにかやりくりしてズレが修復されながら、あるいはズレたまま、遊びが展開して終わった。それぞれが試行錯誤した部分もあり、援助者としてヒントを与えた部分もある。そのバランスをどうするか、いつも考えさせられるし、悩む。とにかくこの日は「お店屋さんごっこ」でここまで楽しめるものとは思わなかったが、参加した私もまたかなり楽しんだことは間違いない。

### 多様なスタイルどうして共に在る

お店屋さんごっこの様子を見ていて、昔暮らしていた土地のケーキ屋を思い出した。そのオーナーは東北の生まれで、職人気質のパティシエだった。無口でお店に立つときも笑顔がない。一方でお母さんは社交的。こうした組み合わせのご夫婦には、臨床現場の仕事でもたびたび出会うことがあった。それぞれ異なるコミュニケーションスタイルがある。流暢に話す社交的な人ばかりではない。しかし、そういうふうになって欲しいと願っている親も少ないのではないだろうか。実際にそのように願っていると聞くこともあるし、言語聴覚士のところに来談するからには言語やコミュニケーションの力を伸ばしたい、とい

う思いがある。流暢に話せて社交的なことは、現代社会が要請しているスタイルに適合していると言えるかも知れない。しかし、誰しもがそうではない。前回、以下のようなことを書いた。

・・・無意識に「みんな一緒」を軸とした関わりが主体になり過ぎると、そのときの子どもの自身の中にある動機が見過ごされてしまうかもしれない。結果的に「みんな一緒」の価値観に適応的であることが優先され、生き生きとしたコミュニケーションの相互性が失われてしまうという、(療育の) 目的とは逆の作用をもたらす可能性があるのだ (対人援助学マガジン 43号)

一方、多様な者同士が共に在ることはやはりズレが大きく、苦痛を伴うこともある。自閉症スペクトラムのあるCくんはたびたび暴発を繰り返していた。クラスの子どもと関わるたびに、思うようにならないと、どうしても暴言になってしまうようだった。それを繰り返していると、周囲との関係も難しいものになってしまう。多くの子は当たり前になんか何気なく過ごすことができる学校生活をかなり一生懸命頑張って過ごし、徐々に心身を消耗して大人から見ると「ちょっとしたこと」で暴発してしまう。暴発している子がいる集団で、本人だけではなく他の子どもにどう関わるのかということが悩ましい場合もしばしばある(そのつもりなく煽ってしまう子もいるし、暴発する子を怖いと思う子もいる)。多様な子がいる場のコミュニケーションはそんなに整然としたものではない。できるだけ誰しもが過ごしやすい環境設定にしていくことは進めていく必要があるが、関係性を調整することが難しい。原則的には周囲の大人

がどのような目を持って、どんな態度で集団の中の個人に関わっているのかということが重要であろう。他の子どもたちは自分以外の子どもへの関わり方をよく見ている。大人の関わり方が子どもたちのモデルとなるしメッセージとなる。ネガティブな状況での立ち居振る舞いは援助者として試される場面といえる。

### 他者とのやりくり算段を重ねること

こうした療育的な活動に援助者やセラピストとして参加する場合、一般的にはアセスメントをしながら関わり方を判断・決定していくプロセスがあることは自明のことといえる。しかし気をつけないといけないのは、療育の現場において、援助する立場にある者が子どもを対象化・客体化することで、暗黙裡に「障害」を前提とした関係性で二者関係を固定化してしまうことである。障害性は社会的関係の中で発生するのだ。障害を援助する(私)が、暗黙裡に問題を助長し、援助される者=障害という見方(スティグマ)を相手に与えていないとは言えない。どんなによくできた療育や教育実践であっても同様である。治療や療育の場における関係性は(信念や使命感もあって)「こうあるべき」「療育とはこういうもの」が強くにじみ出てしまいがちではないだろうかと思えてならない。

多様な他者と共に生きることは相互に主体的な関係を築くことである。客体化や対象化によって関わり合っているのではなく、主体どうしの「やりくり算段」(菅原, 1998)の反復によって関係のかたちを互いにかたちづくっている。「やりくり算段」という言葉は文化人類学者の菅原和孝

が自閉症の息子のゆっくんとのかかわりについて綴った文章の中で使われている。

…認知科学によって自閉症の「論理」がどれだけ精緻に解明されたとしても、それを頭で理解することによって、われわれのかかわりがもっと息のあったものに転化することが約束されるわけではない。子どもとともにともかく毎日を無事に（願わくば愉快地）暮らすためのやりくり算段を重ねなければならぬ親にとっては、いつも冷徹な臨床的なまなざしを保持することなどとうてい不可能である。彼女や彼は、専門家がもたらす無機的な「論理」をロマン的な想像力によって脚色し、そこに（広い意味での）ユーモアを吹きこんでゆかねばならないのである（菅原，1998）。

上記は私が学生の頃書いた自閉症の子どもとのコミュニケーションをテーマにした卒業論文に引用した箇所である。この文章の中にある「やりくり算段」という言葉に目が留まり、いつしか好んで使うようになった。異なる他者と共にあるかたちをつくるには「やりくり算段」を重ねる以外にない。マニュアル的に他者について理解できる幅を広げることは難しい。コロナ禍で物理的に距離を取っている今でも、それ以外の方法はないだろうと思う。

Vygotskyをはじめとする発達の社会文化的アプローチでは「個人の発達が社会的文化・歴史的な脈から切り離すことのできないもの」であり、「個人と社会の関係」は「相互に構成し合う関係」と捉えている（朴，2011）。誰も生きている場にある文化と無関係ではいられない。「お店屋さんごっこ」の中にも、暴発してしまうCくんもそれぞれが生きている場の脈が流れている。その場にある文化と少しのズレで

楽しめる場合もあれば、大きなズレや歪みが起きて苦悩が起こることもある。理想的には、そのズレを埋めるように制度や文化を教え伝える子育てと、1人1人の発達スタイルを尊重した在り方は両立しながら相互に文化を再構成するはずである。しかし今のところ、社会や文化への適応への視線が強く、多様性のある育ちのかたちを社会全体で包摂するまでには至っていないようである。既存の「大きな物語」の文脈に応答するのではなく、1人1人の喜びや苦悩を矮小化せずに応答することが、「大きな物語」で埋め尽くされた社会的関係を再編し、ローカルな文化を再構成する対話的關係のスタートではないだろうか。

#### 〈引用文献〉

- ・菅原和孝（1988）「反響と反復—長い時間の中のコミュニケーション」秦野悦子・やまだようこ編『コミュニケーションという謎』ミネルヴァ書房。
- ・朴東燮（2011）「社会・文化・状況」茂呂雄二他編『社会と文化の心理学ヴィゴツキーに学ぶ』世界思想社。